

景気回復したら起きること

新型コロナウイルスの感染が広がる中で、景気はいつどのような形で回復するのだろうか。景気回復には、いろいろなステージがあるはずだ。

まずは感染被害が収まっていくことで、大きな景気の落ち込みが是正されていくプロセスだ。これはリバウンド(反転)ではあるが、リカバリー(回復)ではない。ワクチンが利用可能になることもリバウンドのスピードを速めるだろう。

ただ景気が本格的にリカバリーのプロセスに入るためには、消費や投資が拡大を始め、潜在成長率が高く

なっていく必要がある。

政府が取り組む政策で、景気の本格的な回復との関連で注目されるのが、DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進とグリーンへの投資である。前者は生産性の向上を通じて、後者は投資による資本ストックの増大を通じて、日本の潜在成長率を引き上げることを期待させるものだ。

日本は長いことデフレ脱却のため、需要喚起策を続けてきた。デフレを避ける上では意味のあるものではあったが、それで潜在成長率が高まるわけではない。だから日本経済の本格的な

伊藤元重の

エコノウオッチ



金利上昇へ心の準備を

回復には至らなかった。

今、コロナ危機で需要が大きく落ち込む中で、需要喚起策が必要なのは明らかだ。ただ需要喚起策だけでは需要不足を補うだけに終わってしまう。それでは経済の本格的な回復は望めない。だから、供給サイドを刺激することが必要なのだ。それが、デジタルでありグリーンなのだ。

こうした供給サイドからの動きがない限り、日本経済の本格回復は期待できない。グリーンとデジタルで日本経済が動き出すことを願いたい。

ただ企業にとって、こうした経済の回復は、経営環境が大きく変わることを意味する。

この20年、特にコロナ後の経営環境の大きな特徴

は、低金利・低成長・低インフレの「3低」だ。企業の資金需要が弱いから金利も物価上昇率も低い。そして経済の成長率も非常に低かった。

ただ、日本企業はこうした環境にあまりに慣れすぎているのではないか。景気の本格回復や、デジタルなグリーンで投資が大きく拡大することは、金利上昇を意味する。

金利が上昇すれば、重い債務を抱える企業への影響は大きい。コロナ危機の中で債務を増やしている企業も多く、気になる点ではある。企業としては低金利のまままでいてくれた方が都合

がよいだろうが、それは景気が回復しないということでもある。

政府は景気を回復させるため、可能なあらゆる手段をとってくるだろう。デジタルでもグリーンでも、あるいは他の景気刺激策でも、それが成功すれば金利は上昇する。日本でそれがすぐに成功しなくても、米

国などで景気回復が鮮明になってくれば金利への影響が出てくるはずだ。日本の多くの企業は低金利というぬるま湯にあまりにも長くつかっていた。そろそろ金利上昇へ、心の準備が必要ではないだろうか。

(学習院大学国際社会科学部教授)